

調査・研究

茨城にほしいも学校が開校

茨城大学地域総合研究所 特命教授

まつさき ちひろ
先崎 千尋

1. 賞味期限付きの本

賞味期限の付いた本が昨年発売になった。と突然言われても、読者の方はなんのことだか分からないと思う。勿論、本そのものには賞味期限はない。それに干し芋を付けて販売したらどうなるか。干し芋には賞味期限があるので、両者をセットにしたのが賞味期限付きになるという仕掛けだ。本屋で買えるのか、みやげもの屋で買えるのか、どちらもありだ。ネットショップは無論のことだ。

昨年10月23、24の両日、東京の青山ブックセンターと茨城県ひたちなか市のワークプラザ勝田で「ほしいも学校」完成記念発表会&トークショーが開かれた。ここで初めて賞味期限付きの本と干し芋セットが発売された。本も干し芋も「ほしいも学校」という名前だ（写真）。

それでは「ほしいも学校」とは一体何なのか？

学校といっても別にそのような校舎（建物）があるわけではない。校長先生もまだいない。いや、先生だっていないのだ。でも生徒はいるから不思議だ。「ほしいも学校」とは干し芋を研究し、干し芋を通して人の営みと環境を考え、未来へとつなぐプロジェクト、である。それって何だ。

2007年暮のある日、ひたちなか商工会議所の小泉力夫さんが干し芋製造業の鬼沢宏幸さん（ひたちなか市）と照沼勝浩さん（東海村）を伴って、東京銀座にある佐藤卓デザイン事務所を訪れた。佐藤さんは、明治のおいしい牛乳やガムのキシリトールなどをデザインした一流のグラフィックデザイナー。NHKの番組「プロフェッショナル」にも出演している。佐藤さんは小泉さんたちが訪れる1年前に水戸芸術館で「日常のデザイン」という展覧会を開き、そこで茨城の特産品の干し芋にホワイトチョコレート^{ほし}を組み合わせた「チョコほし☆いも」を



「ほしいも学校」

写真は、書籍と一緒に茨城産干し芋（200g入）2袋が化粧箱に入ったセット商品（¥3,800）。書籍は400ページを越える異様な分厚さ。干し芋の歴史からその成分、環境との関わりなど、干し芋についてのありとあらゆることが書かれている。書籍のみでも販売されている（¥2,800）。詳しくは「ほしいも学校」ホームページにて。

www.hoshiimogakko.com

地元の菓子メーカーと共同開発していた。

小泉さんたちはそのことを知っていて、干し芋を題材とした新しい商品開発を考え、佐藤さんに相談したのだった。同年に経済産業省が立ち上げた「地域資源活用プログラム事業」の認定を受けてのことだった。

佐藤さんの話によると、佐藤さんは商品開発だけをするには興味がなく、何かもっと地元の人たちと一緒に進めていけるようなプログラムはないだろうかと考え、学校というアイデアがひらめいた。学校と言われて、小泉さんたちは、頭が真っ白になった、佐藤さんの言うことが理解出来なかった、とあとで笑いながら言う。佐藤さんは、学校という言葉を出してから、干し芋の色はなんであんな色なのか、表面にある白い粉の結晶はどんなものなのか等々干し芋についての質問を投げかけたが、ほとんど答えられなかった、と言う。

2. 干し芋から宇宙を見る

佐藤さんの言葉を続けよう。「干し芋のことを一緒に勉強しよう。学校という設定をすれば、そこでいろいろなことが、何だって出来る」。「干し芋というのは田舎くさい名前。あか抜けない。カッコ悪い。不細工。しわだらけ。でこぼこ。不均一。何から何まで現代が求めているのと正反対だ。でもおいしい。そこに魅力を感じてしまった。ここに必ず面白い未来がある」。

佐藤さんの提案は平仮名4文字と漢字2字を合わせた「ほしいも学校」という名前。そして本を作ること。この本にパッケージにした干し芋をセットにすることだった。こうしてほしいも学校プロジェクトはスタートした。

作業の最初は、これを完成させるために何をすればいいのかを考えることだった。この活動に地元の若い人たちが加わるようになり、活動の輪が広がっていった。私もこの段階で干し芋の歴史をまとめるためにプロジェクトメンバーに加わった。2009年、2010年にはひたちなか市と東海村で干し芋シンポジウムが開かれ、干し芋に関心がある人たちが全国から集まった。またサツマイモや干し芋のことに詳しい国や県の試験場と現場の第一線に立つ農業改良普及センターの研究者たちの援助も受けられるようになった。本会に関係の深い日本いも類研究会会長の井上浩さんには最初にサツマイモや干し芋についての全国の情報を教えていただいた。情報、資料の収集過程は静岡県御前崎市から始まり、まさに「いもづる式」と言えるように次から次へ、だった。

では、「ほしいも学校」という本をどんな内容の本にするか。日常扱っているプロでさえ干し芋のことをよく知らないのだから、干し芋のすべてを解剖してしまおう、というのが最初のコンセプトだった。茨城に干し芋の製法が伝わった歴史から始まり、干し芋の色、形、大きさ、しわ、つや、厚さ、手触り、重さ、味などの干し芋そのもの、そして干し芋が私たちの口に入ってから外へ出るまでの体内での動き、原料の生イモ、干し芋の作り方、道具、干し芋を使った料理など。出来るだけ分かりやすいように写真を多く使うことも決めた。

項目ごとに分担を決め、打ち合わせや調査には佐藤さんも加わった。発見の連続だった。

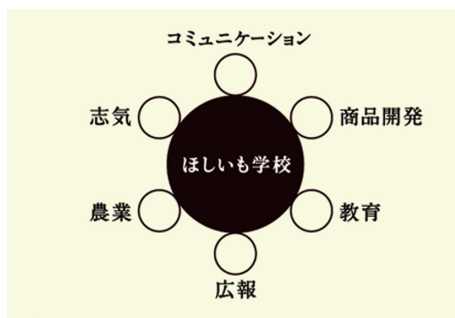
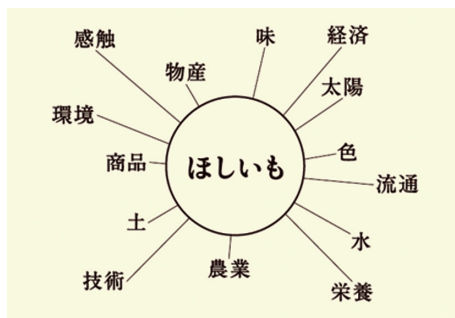
つくばみらい市にある独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構作物研究所

谷和原圃場の数千種に及ぶイモ畑、那珂市の藤田誠一さんの佐藤さんが言う芸術的な干し芋製造現場を見たことは佐藤さんにとって忘れられない記憶となった。

ここで改めて佐藤さんが最初に学校と投げかけた「ほしいも学校」のコンセプトを整理しておく。「ほしいも学校」プロジェクトの目的は次の6つに整理される。

- 1) 地域の人々を繋ぐコミュニケーションの場となる
- 2) 本の出版や商品開発の場となる
- 3) ワークショップなどの教育の場となる
- 4) 地域の情報を広く知らしめる広報の場となる
- 5) 日本の農業、食育を考える場となる
- 6) 地域の人々の志気を高め、後継者を作る場となる

何か、選挙の時の公約、スローガンのようだが、プロジェクトメンバーの目指す想いが分かるようだ。それを具体化したのが



次に掲げる二つの図である。「ほしいも学校」は、干し芋という食材を通して社会の構造、人の営み、人体の構造、自然環境へと繋がっていく。つまり、干し芋を知ることとは私たちの環境を総合的に理解し、干し芋を通して宇宙を見ることになる。学校と聞くと、なんとなく身構えるが、なんだそんなことか、そしてなるほどそうか、だ。

3. 校歌、応援歌もあるほしいも学校

ほぼ2年に及ぶ調査と取材の結果、冒頭に書いたとおり、昨年10月に本と干し芋のセットが完成した。本は基礎講座、パッケージ講座、干し芋講座、人体講座、環境講座、調理講座の6章で構成され、B5判433頁の堂々たる本になった。「干し芋事典」である。この中で気になる人体講座は、口腔、食道、胃、小腸、肝臓、胆嚢、膵臓、大腸、おなら、大便、小便の11項目から成る。干し芋が口に入って外へ出るまでの過程が細かに分析されている。

本にはなんとほしいも学校の校歌と応援歌もある。これは佐藤さんの仲間であるコピーライターの日暮真三さんが「学校なんだから、校歌が必要でしょう」と作ってくれたもの。ただしメロディはまだない。完成させない、これから誰かが作るだろう、という考えからだ。さらに、本の中には随所に干し芋じいさんのかわいい、しゃれたイラストが登場する。イラストレーターの寄藤文平さんの作品だ。協力者は個人、関係機関を合わせて70を超す。私が担当したのはこの中の歴史の部分だ。しかし、調べ出したらいろいろなことが分かり、全部のことをこの本に盛り込めず、本冊が出る前にとうとう一冊の別の本『ほしいも百年百

話』（茨城新聞社刊）にしてしまったというのが内輪の話だ。

佐藤さんの話だと、最初に考えた分量の倍になったとか。とにかく、干し芋のことだけでこれだけの分量になったことは関係した私にとっても驚きだ。普通の出版社だったらまず手がけられないだろう本が出来た。発行はこの事業全体を仕切っている「有限責任事業組合（LLP）ほしいも学校」で、初刷りは3,000部。すでに2,000部以上が売れている。

では、もう一つの作品である「ほしいも学校」という干し芋はどうか。ネーミングはおいしい牛乳と同様にひらがな4文字に漢字が2文字。品種は玉豊で天日乾燥。扱う各社の一級品とする、と決めた。内容量は200グラム入りと1枚入り。このパッケージは本と同様にLLPほしいも学校から購入する。本とパッケージはひたちなか市、東海村のほしいも業者ならどこでも使用、販売出来るが、現在のところ扱っているのは三業者のみである。本と干し芋が入ったセットもある。書店のほか常磐自動車道友部サービスエリアなどでも販売されている。これからのほしいも学校の運営費は本とパッケージの売上代金で賄っていく方針だ。

4. ほしいも学校の目指すこと

では、ほしいも学校はこれから何をしようとしているのか、何をを目指すのか。

昨年暮には早速ひたちなか市にある国営ひたちなか海浜公園から声がかかり、ワークショップを開いた。さらに今年に入って、水戸徳川家が関わる水府明德会のはからいで水戸黄門の隠居所である常陸太田市の西

山荘と水戸市の徳川博物館でも干し芋づくりのイベントが開かれた。若い人、子連れの参加者が目立った。干し芋を食べたことはあるが、作るのは初めて、という人たちだった。水戸市では佐藤さんのトークショーが開かれ、150人が参加した。ほしいも学校プロジェクトの立ち上げ、苦労話、裏話、今後の展望など話題は広がり、2時間はあっという間に過ぎた。遠く鹿児島県種子島からの参加者もあり、主催者は感激していた。

これからの活動は、ひたちなか市、東海村、那珂市の生産者や子どもたちへほしいも学校のメッセージを伝え、干し芋づくりの体験、干し芋資料館づくりなど干し芋のことを知ってもらうさまざまな仕掛けを行っていき、次の100年を目指した活動を展開していこう、としている。さしあたって、今秋か来春にほしいも祭を開く準備を進めることにしている。学校だから放課後の会があつていいのでは、キャラバン隊を組み、全国各地で干し芋展覧会を開く、本の英訳版を作ろうなどさまざまな提案が出されている。さしあたっては、メンバーの力量に応じ、可能なことから一つ一つ取り組んでいくことになろう。まずは地域内での認知度を高めていくことが最重要課題となる。

ただ、3月に発生した東日本大震災により、干し芋の最大市場である東北地方がダメージを受けており、原発事故の風評被害と相まって業界全体として苦悩の種となっている。しかし、ほしいも学校では、これもひとつの課題として前向きに受け取っている。